

グツグツとおとをたてる はろはろやまのふもとに
かぞくよにんでくらす おとなしい おとこのこがいました。
なまえはレオ。

レオは えをかくことが だいすきな しょうねんで
たんじょうびに おとうさんから もらった えんぴつと
スケッチブックでいつも えをかいていました。

そのひも はろはろやまから きれいなむらのえをかこうと
おきにいりの えんぴつとスケッチブックをもって
やまのおかをめざして のぼっていきました。

しばらくいくと レオは いつも とおるみちに
みたことのない おきものを 見つけました。

レオは どうしても きになって そのおきもののほうへと
行ってしまいました。

おきものを たどっていくと おおきくてりっぱなとうが
みえてきて、レオはめのまえにある おもたいとびらを
ゆっくりとあけました。

きがつくと　そこはまっくらで

どちらが　うえかしたかも　わからなくて

コウモリのはねのおとだけが　バタバタと　さわがしく

ひびいてきました。

レオは ゆうきを だして ゆっくり あるきだすと

「ひゃっ！！？」

まるで おおきな おもちを ふんでしまったかのような
かんしょくがして、 そこからひめいが きこえてきました。

レオは とっても こわくなって いそいで はしりだしま
した。

「もう はやく いえにかえりたい！」

なんどもそうおもいながら こわいきもちを
ぐっとかまんして ひっしにはしりました。

すると……

すこしずつ ひかりがみえてきて ようやく くらやみから
ぬけだすことが できたのです！

ひかりのさきには

とってもうつくしいもりが ひろがっていました！

レオは そのカラフルで うつくしいもりに かんどうし
むちゅうになって そのもりのえを かきはじめました。

レオが えを かいていると もりの きのかげから
ふしぎそうにレオをみつめる ようせいがいました。
ようせいのハーブは えにおちゅうになっている レオに
ゆうきをだして はなしかけてみることにしました。

「えを、、、かいているの？すごくたのしそうだね？」

レオは うれしそうに こたえました。

「きみもいっしょにかいてみるかい？」

ようせいのハーブも とても うれしくなって いいました。

「ほんと！？いいの！」

うつくしい もりのなかで

ふたりは なかよく えをかきはじめました。

レオは、ハーブが かくカラフルなえが とてもすきになり、
ふたりで えをかく じかんが だいすきになりました。

きがつくと、おうちにかえりたいという きもちを すっかり
わすれてしまうほど おちゆうに なっていたのです！

レオは だんだんと ハーブのことを もっと もっと
しりたいと おもうようになって、

ハーブに たずねてみました。

「ぼくと えをかいていないときは なにを しているの？」

すると、ハーブは

レオに じぶんのひみつを おしえてくれました。

「ぼくは みんなみたいに そらを とべないから
いつも ひとりぼっちなんだ。

ぼくが なにを やっても できっこないって
みんなが おもってる。

ぼくだって すこしは みんなみたいに じゆうに
そらを とんでみたいんだ！」

ハーブは ようせいのはねを うまくつかえませんでした。
そのせいで なかまのようせいたちから
ひどく ばかにされていたのです。

ハーブは さびしそうな こえで つぶやきました。

「でも、だれも ぼくを みてくれない。

ほんのちょっとしたのことも もりやみんなの

やくにたちたい。

そしたら みんなも すこしは ぼくを

ほめてくれるかも しれないから……」

ハーブは しくしくと なきだしてしまいました。

レオは かなしむハーブのようすが すこしずつ

かわっていることに きがつきました。

ハーブの みどりいろの かみから だんだんと
いろが なくなっていって しまっていたのです！

「どうしたんだい？」

レオは あわてて ハーブを きづかいました。

それでも ハーブは なきやみません。

レオは ハーブのなみだが ぽたぽたと じめんに
おちるたびに もりのいろまで すこしずつ
かわっていつている ことに きがつきました。
それまで カラフルで うつくしかった もりは
すっかり いろが ぬけおちてしまい、
まったく ちがう もりへと かわってしまいました。

そのとき レオは ちかくに ハーブの にじいろの
えんぴつが おちているのを みつけました。

レオは なんとか ハーブを げんきづけるため、
スケッチブックにかいていた もりのえに
にじいろの えんぴつで
カラフルな いろを つけていったのです！

レオは めを かがやかさせながら できあがった
もりのえを ハーブに みせました。

「ぼくも えをかいているとき うまくいかないことが
よくあるんだ。でも、えは じぶんの かきたいように
じゆうに えがけるんだよ！」

レオのかいた そのもりのえは とても カラフルで
うつくしい えでした。

レオはいいました。

「いっしょに かいてみるかい？」

ハーブは レオから にじいろの えんぴつを うけとり、
かれた いっぱんのきに いろを つけました。

レオは ハーブをみて にっこり わらいました。

ハーブは うれしくなり、つぎつぎと かれた もりのきに
いろを つけはじめたのです！

すると、もりぜんたいが だれも みたことのない

カラフルな いろに そまりました！

しばらくして、もりが かわったことに きがついた
ようせいたちが ハーブとレオのまわりに
あつまってきました。

そのなかで いちばん としおいた ようせいのじいさまが
ハーブに いいました。

「ハーブよ、これはおまえが やったのかい？」

ハーブが うなずくと、

ほかのようせいたちは みんな おどろきました。

それまで ハーブをバカにしていた ようせいたちも

ハーブを すごい ようせいだと たたえました。

すると、とうとう レオが おうちに かえるときがやって
きました。

ようせいの じいさまは もりのきやはっぱを うごかして
おおきな とびらを つくりました。

「とびらを あけて まっすぐいけば おまえさんがいた
ばしょへ もどれるはずじゃ」

ようせいの じいさまは

ハーブの さびしげな せなかを ぽんっと おしました。

ハーブは ゆうきをだして レオに おわかれを いいまし
た。

「いつか もっと もっと りっぱな ようせいになって、
きみに あいにいくよ！」

レオも うれしそうに わらって こたえました。

「きみは とっくに すごい ようせいだよ！
ぼくたちなら きっと また あえるさ！」

そうして、ふたりは やくそくをして

レオは とびらを あけました。

レオは こわれた とうのまえで
どこか うれしそうに すやすやと ねむっていました。
はなれていても レオとハーブは
おたがいに わすれることは ありません。